

西行の水の歌の表現

表 慶娥

西行の歌の素材についての検討が、従来、多く試みられている。ところが、その検討は、花と月の二つの素材を対象としたものが多く、花月の歌人としての西行の独自の歌境を探るという偏った傾向を見せている。もちろん、西行には、月の歌が三七〇余首、花の歌が三五〇余首と高い数値を示しており、それだけ、それらの歌が西行の特色であるわけで、花と月が西行の代表的な歌材であることは確かである。しかし、花と月を素材とする歌の表現の分析だけでは、西行という歌人の中に潜んでいる詩的氣質、詩的想像力を完全に探り出すには十分ではないと思われる。花月の歌人という西行の固定されたイメージでは偏ってしまうと考へるべきであろう。

こういう問題意識のもとで、本稿では、西行における「水」を詠んだ歌の表現を、水の様々な現象と結び付いた発想によるものと空間として表れた水という大別二つのグループに分けて、検討してみたいと思う。

本稿に引用する西行の歌は、『山家集』（六家集本山家集）『聞書集』『聞書残集』を完本として収め、拾遺として『西行法師家集』『御裳灌河歌合』『宮河歌合』、また勅撰集、私撰集などのみに伝わる歌を一括して収めている日本古典全書『山家集』（伊藤嘉夫氏註、朝日新聞社、一九四七年）による。

二

表現分析に入る前に、西行の歌にとりあげられた水の全般的な傾向について見ておくことにする。

現存する約二一〇〇首の西行歌中、水を詠んだ歌、地象の水を素材にした歌は、約三七〇首見られる。

西行の諸家集についてその分布状況を調べてみると、『山家集』に約二七五首、『聞書集』『聞書残集』に『山家集』と重複のないのがそれ五五四首、六首である。『西行法師家集』には七一首見られるが、初出歌一〇首を除いて、その内、『山家集』と五九首、『聞書集』と二首が重出している。『西行法師家集』には七一首、『山家心中集』には、その内の四四首が水を詠んだ歌である。さらに自歌合の『御裳灌歌合』『宮河歌合』では、それぞれ一首、九首が水を詠んだ歌である。

このように、西行の家集においては、水を詠んだ歌は、数値的に大きい比重を示しているが、勅撰集に入集した西行歌で水を詠んだ歌は、勅撰集約二六六首の中の二二首というわずかなものである。勅撰集の和歌の世界では、水の歌という西行歌の独自のものは受容されていないのである。

部類から見ると、四季歌、雑歌、禰旅歌に水を詠んだ歌が多い。四季歌の中では夏歌が多く、特に五月雨の頃の地上の自然現象、またその体験を詠んだものが多い。他にも、水辺、水上のあやめ、真菰、葦、卯の花、蓮、螢、蟬を詠んだ歌、納涼を求める歌、夏の夜の水上の月を詠んだ歌などがある。春の歌では、山里の水、農耕生活の水を詠んだものが、冬の場合は、隠遁生活が背景にある山里の水の歌が、注目される。秋の歌の場合は、海上の月、池上の月の歌が多く、海上の月の歌には月の名所を詠んだものが多い。

雑歌の場合は、『山家集』でいうと、その詠み方と歌材の選び方にお

いて早くから注目されてきた二条院の貝合の代作、備前国から讃岐へ渡ろうとした西行の目に触れた海士の生活様態を詠じたもの、川魚を捕まえるのを見ての詠のような歌群などが水の歌である。禪旅歌には海を素材にしたものが多く、地名、歌枕を詠んだもの、あるいは、旅路での体験、見聞を詠んだもの、海路での歌などがある。

ところが、自歌合の『御裳灌歌合』『宮河歌合』に番えられている水の歌二〇余首の殆どは、四季歌の山里の水、農耕生活の水を詠んだもの、禪旅歌の旅路での川や海を素材にしたものである。西行自身は水の歌の中でもこれらの歌を高く評価していたと思われる。

三

最初に、水の現象面と結び付いた発想による歌を取りあげ、その表現における西行的なところを明らかにする。

西行の水の歌には、水を鏡照する景として取り入れたものより、水の現象面を歌ったものが圧倒的に多い。その内一番多いのは、流れの現象を歌ったものである。とくに、細かく流れる水と落花が流れる水とに注目すべき点がある。

まず、細かく流れる水の歌には、岩間の水、洩れてくる細水、苔の下水の流れ、雪の下水の流れなどを細かい感覚と観察力で見つめ、その微妙な動きを豊かな詩的想像力で歌ったものが目立つ。例えば、次の二首のような歌である、

山水春を告ぐるといふ事を、菩提院前齋宮にて人々よみ
侍りし¹
一七 はるしれと谷のほそみつもりぞくるいはまの水ひまたえにけり

初春

一九三九 岩間とちし水もけさはとけそめて苔のした水みちもとむらむ
一首目は、「春知れ」というように谷の細水が洩れてくるという現象を対象に、岩間の水が解けて隙間ができたのたなあと詠んでおり、二首目は、岩間を閉じていた水も今朝は解けはじめるという現象を対象に、苔の下の水も道を探って流れ出すことであろうと詠んでいる。細かい感覚と観察力をもとに、詩的想像力が豊かに表れた二首であるといえよう。
一七番の歌は、『山家集』『西行法師家集』『山家心中集』に載せられており、一九三九番の歌は、『西行法師家集』初出で、『御裳灌河歌合』に番えられており、『新古今和歌集』にも入集している。

一方、細かく流れる水とともに注目されるのが、落花が流れる水を詠んだ歌である。

落花が流れる水は勅撰集の世界でもかなり採られているものである。ところが、『古今和歌集』の、

水の辺に梅の花さけりけるをよめる 伊勢

四三 春ことにながる、河を花とみておられぬ水に袖やぬれなむ²
の歌のように、勅撰集では水上落花のカテゴリーを外れないものが多いのに比べ、西行歌では、

花

一八〇〇 山ざくら散らぬまでこそ惜しみつれふもとへ流せたにがはの水

と、散るのを惜しむ心が満ちて行くのを、谷河の水を擬人化し、さらに散る桜を簾へ流せと歌っている。右の歌のように、落花と流れの現象を強く結び付けている点が注目される。この歌と類似したものに、桜の花に早く散れと誘う山水を詠んだ、

寄花述懐

一七〇七 花さへに世をうきくきなりにけり散るを惜しめばさそふ山
みづ

のようなものがある。この二首の根底には、落花の流れに対する西行の感情がモチーフとして働いており、これは、先ほど見た細かく流れる水が細かい感覚と観察力にそのモチーフを持つとは違う点である。

以上のごとき、流れの現象を四季の移り変わりつまり主に自然との関わりから歌った歌の他に、流れの現象を比喻・象徴的に用いたものがある。そのような歌は恋歌に一二首余り見られる。その殆どは、次に挙げる歌に見られるように、川のごとく流れる涙に忍ぶ恋を比喻・象徴したものである。

恋

七二四 なみだがはふかくながるるみをならばあさき人めにつつまざ
らまし

七二六 ものおもへば袖にながるるなみだがはいかなるみをにあふせ
なりなむ

この類の歌は、川のように流れる涙という涙川の歌語を使った表現をはじめとして、勅撰集の世界でもさほど珍しくない伝統的な詠み方に属するものの、『聞書集』に載る、

忍恋

一七六〇 こけふかき岩の下ゆく山水はまくらをつたふなみだなりけり
初めおろかにして未増す恋

一八〇七 我が恋はほそ谷川の水なれやすゑにいほわるときこゆなりの二首のように、先に触れた、自然現象としての細かく流れ出す水、それを敏感な感覚で見つめた四季歌とは違って、細かく流れ出す水に隠れ

ている激しさを裏の目で見つめる表現であるわけで、西行的な個性が窺える。

さらに、以上のような、細かく流れ出す水を一次的な自然物としてではなくその属性に注目しているものに、次のようなものがある。

龍門にまゐるとて

一五二六 きみがすむきしいはよりいつる水のたえぬ末をそ人もくみ
ける

この歌は、見方によつて、春の歌とも賀の歌ともとれるが、ここでの、岸の岩より出る水の絶えない末は、春を知らせるものという役割よりは、解けて流れて凍ることを繰り返す水の循環の理といったその属性に注目し、賀歌らしい永遠性を表現しているものと思われる。

いまひとつ、水の流れを仏教的な面と関わる比喻・象徴的な表現に用いた歌がある。

この類の歌は、釈教歌が部立てとして定位されている『千載和歌集』『新古今和歌集』にもかなり見られるが、西行歌では、仏心を表す水の歌の中でも、次のような歌にその個性が窺える。まず、『聞書集』に載る法花経廿八品歌の中の次の一首である。

菓草品 我観一切 普皆平等 無有彼此 愛憎之心

一六四八 ひきひきに苗代みづをわけやらでゆたかに流す末をとほさむ
「仏の平等観を、西行はみづからの平等観に置きかえ、苗代水の公平なる分配という譬喩を着想したのであろう。經典の教説を主体的に受け止めるのは西行の特色で、この二十八品歌の随所に見うけられる」という評価のように、この歌での水は仏の平等観を象徴する水とも解釈されようが、さらに出家の身として願う道を象徴する水とも解釈できる。つまり、水を流して未まで通すようにしたいという表現には、西行のひたす

ら悟りの世界に向かおうとする意志が込められているとも見ることができるのである。そして、先の賀歌に見られる水の歌が水の循環の属性による永続性を表現しているのに対して、この表現の裏には、水の流れの連続性、志向性が表現されているといえよう。また、同じ『聞書集』に載る十案の第六、引接結縁案を題とする、

一七九二 すみなれしおぼろの清水せく塵をかき流すにぞ未はひきけるの歌も、浄土の世界に向かうということに、この水の流れの連続性・志向性が用いられて表現されているのである。

四

水の流れの歌に次いで、水の一面である「波」を歌った歌について検討してみる。

まず波が持つ性質を用いた約四〇首の歌の傾向のひとつとして、

人々すみよしにまゐりて、月をもてあそびけるに

四五一 浪にやどる月をみきはにゆりよせてかがみにかくるすみよし

のきし

の歌のように、映った月を始めとして、貝、舟などを移動させる役割としての波を歌っている。その殆どは明るいイメージの景を形成する構成要素として使われる場合が多い。その波に物を移動させる力を与えるものとして、風が併せ歌われる例もかなり見られる。例えば、

二条院の内に、貝合せむとせさせ給ひけるに人にかはりて

一二七九 かせふけばはなさくなみのをるたびに桜がひよるみしまえの

うら

冬歌

六一六 かせさえて寄すればやがてこほりつつかへるなみなきしがのからさき

のように、風が波に物を動かす力を与えるものとして用いられた歌があり、あるいは、風が水を氷らせてしまつてその波の力をとめるものとして用いられた歌もある。

また、波そのものが移動することと関わって、次のように、黒と白の色彩イメージを用いた歌において、黒と白を対照、あるいは混合させる媒介物としても波が歌われている。

二条院の内に、貝合せむとせさせ給ひけるに人にかはりて

一二八四 なみよするしららのはまのからすがひひろひやすくもおもほ

ゆるかな

伊勢の答志と申す島には、小石のしろのかぎり待る濱にて黒はひとつもまじらず。むかひて菅島と申すは黒のか

ぎり待るなり

一四七三 すがしまやたうしのこいしわけかへてくるしませよ浦の濱

かせ

一四七四 さきしまのこいしのしろをたか波のたうしの濱に打ちよせて

ける

貝合の代作の一首は、白と黒の黒と対照させるものとして波が用いられており、答志島・菅島の石がそれぞれ白・黒と分けることに興味をもって詠んだ二首は、白石と黒石を対照、混合させるものとして風と波を用いている。

ところが、自然界での白と黒を明るく詠んだ歌に比べて、人間界の白と黒を扱った表現に用いられている波は、少し違ってくる。例えば、

新宮より伊勢のかたへまかりけるに、みきしまにふねの
 さたしける浦人の、黒き髪はひとすちもなかりけるをよ
 びよせて

一四八八 としへたるうらのあま人こととはむ波をかづきていくよ過ぎ
 にき

一四八九 くるかみはすぐるとみえし白波をかづきはてたる身にはしれ
 あま

の二首は、先の歌と白と黒に波を用いた発想は類似しているものの、こ
 の歌での波は、ただの白と黒の色彩の対照、混合の媒介物としてだけで
 用いられているのではなく、海士の海での生活を象徴するものとして、
 黒髪を白髪に変えさせるものとしても歌われていると見てよい。

一方、

月

一五六七 はなれたるしらはまのおきのいしをくだかであらふ月の
 白波

のように、波は月と結ばれ、白のイメージを増すものとしても歌われて
 いる。白と黒の発想での波の歌の例で見られるような素朴な世界とは違
 って、美的世界である。

以上、物を移動させ、或いはそれ自体が移動する性質を持つ波による
 色彩イメージの変容について検討したが、その他にも、波の状態に関わ
 ることがらを表現して、その発想を展開していく歌が見られる。

題しらず

一〇八七 いそにをるなみのけはしくみゆるかなおきになごろやたかく
 行くらむ

旅の歌とて

二二三三 波もなし伊良胡が崎にこぎいでてわれからつけるわかめかれ
 海士

のように、磯に打ち寄せる荒い波、波のない海といった、波それ自体の
 状態の変化を歌った歌がそれである。

五

水の現象面を用いて歌った歌の他に、また西行の個性的な表現が見ら
 れるものとして、空間的イメージとして表れる水の歌がある。これは、
 大きく体験の空間として表れた水と観照の空間として表れた水とに分け
 ることができる。前者、つまり海士、筏士、商人、農民の生活の場であ
 る水での体験歌については、たびたび先行研究で論じられてきているの
 で、ここでは、後者の方に焦点をあわせて、その表現について検討して
 みる。

歌中に、観照の空間として表れた水の多くは、自然の景物の背景とし
 て用いられたものである。例えば、月の照っている海上(三五六、三五
 八、三五九、三六一)、月の宿る清水(一〇二八)、月の宿る岩井(一
 〇二九、一四五九)、月の宿る池(三五五)、水敷いた水上(六〇七、
 六一三)、霞立つ海辺(二一〇四)、藻塩焼く浦(一九)、船の漕ぎい
 である浦(五九五)、鰹釣り舟の並び浮いている海上(一四七九)、阿古
 屋(真珠)をとった後の貝殻を積んでおいた浦(一四七八)、鷹の渡る
 海(一四八〇)、千鳥の渡る海・千鳥の鳴く浦(五九九、六〇一、六〇
 二、六〇三、六〇四)、鳴たつ沢(五一五)、蓮の咲いた池(二五九、
 二〇〇三、二〇〇四)、水辺女郎花(三三三、三三四)、水辺燕子花
 (一八三)、水辺卵の花(一九七、一九八)、水辺山吹(一八六)、水
 辺柳(六六)、水上落花(二五五二)、水上落葉(五四六)、水辺寒草

(五六一)、水辺螢(一八三四)など、多様なものがあげられる。

その殆どは四季歌と驛旅歌であり、四季歌の場合は題詠が多く、驛旅歌の場合は独詠の形式で詠まれたものが多い。特に驛旅歌に見られる水を背景とした歌には、阿古屋、ひび、輕釣り舟のような、歌語としては珍しいものを素材として用い、旅路で接した現実的な風景からの実感を詠んだ個性的なものがかなり見られる。

一方、このような自然の景物の背景としての水の歌には、その情景に対する凝視力のある観照の態度を取る歌がある。

かきつばた

一八三 ぬまみづにしげる真菰のわかれぬをさきへだてたるかきつば

たかな

ちよつと見たところでは真菰か燕子花か区別がつかなかったが、燕子花に花が咲いてその区別があきらかになった、というこの歌には、上句の自然に対する好奇心から下句の燕子花を燕子花と真菰との区別がつくときまで、長い凝視といった観照の態度がその裏にあると言えよう。

西行の水の歌には、水を背景に、このような観照姿勢を取る表現がかなり見られる。その内、特に注目されるのは、視覚における錯視現象を発想のモチーフとして使った歌である。一〇余首見られるが、全て四季歌である。水の歌だけに限るわけではないが、西行は四季の情景を描くひとつの表現スタイルとして、この視覚における錯視現象の発想をよく用いたと言えよう。例えば、次のような歌がある。

同じ心(海辺霞)を、伊勢にふたみと云ふ所にて

二〇 浪こすとふたみのまつの見えつるはこずるにかかる霞なりけり

花歌十五首よみけるに

一六七 山おろしにみだれて花のちりけるを岩はなれたるたきとみたれば

海波映花色

一六九九 花と見えて風にをられてちる波のさくら貝をばよするなりけり

「浪こすと」の歌は、松を浪が越えているとありそうもないことのように見えたのは、実は梢にかかる霞であったと詠んでおり、二見という地名に二つに見えるという意味あいを掛けている。二首目では、岩壁を離れて滝水が落ちていると見たのであるが、よく見ると山おろしのために花が乱れ散っているのがあった、と詠んでいる。また、「花と見えて」の歌は、花と見えたのは実は波が桜貝を岸辺に打ち寄せるのがそのように見えたのであったと詠まれている。このように錯視の現象を「見立て」に通じる発想のモチーフとして用いた歌は、例歌のように春の歌が多いのであるが、春の歌の他にも、次のような歌がある。

同心(池上月)を遍照寺にて人々よみけるに

三五四 いけにすむ月にかかれるうきくもははらひのこせるみさびなりけり

雪

一五七八 いかだしのなみにしづむと見えつるは雪をつみつくだるなりけり

前の歌は、池に澄んでいる月に浮雲がかかっているように見えるのは、実は十分に払いきれなかった水さびであったことよと詠んでおり、後の歌は、筏士が波に沈んでいるかのように見えるのは実は筏士が雪を積んで下るのを見てそう思ったことだったと詠んでいる。

ところで、以上取りあげた歌は、二首を除いては、「何々は」と提示

して「なりけり」で終止している。これは水の歌だけに限る個性ではないが、上句と結び付き、何々であると見えたのは、実はそうではなく何々であったのだという見立ての発想法にふさわしい止め方であろう。

六

以上、西行歌における水を素材とした歌の表現について、水の現象面と結び付いたものと空間的イメージとして表れた水の二つのグループに分けて検討した。水の現象面の中でも、流れと波を用いた歌について考え、それに空間として表れた水の中で、視覚的な面、とくに錯視現象の用い方について考えてみた。これらのグループにはそれぞれ、表現における型があり、その表現型から西行的なものが見出せた。

とはいえ、他の歌人の水の歌について殆ど分析を行っていないので、以上の検討が間違いなく西行のみの特色であるのかどうか、断定できない。それに、その表現における表現型が、和歌史のなかでどのような影響関係に置かれているかという点についても検討が必要である。今後、以上のような問題を補っていく考察を試みたいと思う。

[注]

- (1) 「題知らず」になっているものを、『山家心中集』により、補われた詞書。『西行法師家集』には「初春」の題が付けられている。
- (2) 『国歌大観』所収による。
- (3) 山田昭全氏『西行の和歌と仏教』（明治書院、一九八七年、八四頁）
- (4) 山折哲雄氏「生死の海——西行と仏教」（『国文学』、一九八五年四月、学燈社）、稲田利徳氏「南海道の西行——海浜の人々への視線」（『国文学』、一九九四年七月、学燈社）など。